図書紹介

日本学校音楽教育実践学会 [編]
『生成を原理とする21世紀音楽カリキュラム—幼稚園から高等学校まで—』
権藤敦子(広島大学)

本書は、これまでの新しい音楽科の授業の創造に向け、21世紀の幕開けにあたって日本学校音楽教育実践学会が開発した音楽カリキュラムの提案である。

内容は大きく理論編と実践編の2部に分けられ、実践編の幼稚園、小学校 (低、中、高学年)、中学校、高等学校、養護学校、教員養成を対象としたプログラマム案と年度指導計画案に多くのページがあたられている。全体を通じて、カリキュラムは実践への手続き、学習指導案作成方法と例、評価、といった、実践現場からの視点で本書を活用するための細かな配慮が行き届いている。全体の目次は、以下のとおりである。

第Ⅰ部 理論編：カリキュラムへの導入
第1章 カリキュラム構成を支える哲学
第2章 カリキュラムの見方
第3章 カリキュラムの使い方
第4章 教員養成のカリキュラムのあり方

第Ⅱ部 実践編：カリキュラム構成と実践
第1章 カリキュラム構成
第2章 プログラム案
第3章 年間指導計画案

付録 英語版カリキュラム、指向項目表

カリキュラム全体に「生成」という原理が通底し、「人と地域と音楽」「音楽の仕組みと技能」「音楽と他媒体」という柱(スクープ)を、幼稚園から高等学校までの発達段階(シーケンス)とクロスさせ開発された座標軸にしたがって、実践への提案が示されている。また、「音楽の仕組みと技能」という柱では、「日本伝統音楽の音楽的実践は近代西洋の芸術音楽のそれとは対照的である」という理解のもとに、内容が「日本伝統音楽」と「それ以外」に分けられている。カリキュラム全体の柱組みに位置づけるため、指導項目や用語の設定に苦心があったようだが、日本音楽のこのような捉え方は、それぞれ19世紀から持ち越された宿題への解決の糸口とならるものであり、優れた実践による検証と展開が切に望まれる。

21世紀後半期をふりかえると、戦前の教育への反消にもとづき、教師が主体性をもって教育課程を編成していく「手引き」として発行された学習指導要領が「基準」とされるようになり、指導書に沿いながら教科書を教える方向に向かうなかで「カリキュラム」という用語は現場から違いものとなっていったように思われる。しかし、「子どもの目線からの、もうひとつ別のカリキュラム概念が提起されるようになってきた」21世紀に、日本学校音楽教育実践学会の50名以上の委員、メンバーと、学会大会「課題研究」における議論の参加者が、立場や意見の相違を超えて、共通理解を形成しながら、幼稚園から高等学校、教員養成、特別支援教育をも視野にいためた音楽カリキュラム開発に着手したことは、画期的な取り組みであるといえよう。「現行の学習指導要領を視野にいたって、諸外国のカリキュラム研究もふえてきて、現行学習指導要領に限定されない、音楽教育としての普遍性をもったものを追求してきてた」という「あとがき」の言葉にあるように、それぞれの専門性を結集した成果である本書に、ぜひじっくりと目を通し、実践に生かしていただきたい。

しかし、「普遍性を求めて実践検証をさらに積み重ねること」「学校や子どもの現状に応じて本カリキュラムのパーソナライズを作成すること」という今後の課題を考えたとき、この主筆者が実践にあたる教師自身であることを再度認識する必要があるだろう。柱組みを設定することによって、そこに入りきらない子どもや学校、地域、そして、音楽の有り様を覚とすことでもある。学習指導要領に代わるものとして依拠するのではなく、本書から学び、子どもと音楽に向き合い、教師自らがカリキュラムをデザインし、その一部となる力を培っていくことこそ、21世紀の音楽教育を創造する原動力となると考えられる。

(B4版、315頁、東京書籍、2006年、2500 円)